

Ⅳ－10 学校の統廃合に伴う生徒・児童の通学交通環境の現状と課題について

岩手大学工学部 正会員 岩佐 正章
 岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 学生員 ○白井 正章

1. はじめに

子供の通学路は、自宅から学校まで、歩いて通えることが大切である。しかし、過疎化や効果的教育等を理由に、統廃合が必要とされる学校は今なお存在しており、統廃合を実施すれば、学校が遠くなる為、徒歩での通学が困難になり、バスや自転車等、徒歩以外の手段で通学する生徒・児童が数多く発生することになる。

本研究は、統廃合実施地域の通学交通環境の実態を把握するとともに、統廃合実施地域における通学交通環境の今後の課題を探索しようとするものである。

2. 調査対象および方法

岩手県内において、過去に行なわれた小中学校の統廃合の状況を知る為、昭和53年度から平成3年度までに統廃合の実施された学校を管轄している33市町村の教育委員会に対し、郵送によるアンケート調査を行なって、30市町村から回答を得た（回収率91%）。調査期間は、9月24日～10月28日である。

さらに、統廃合実施地域の現状を把握して、通学交通環境の課題を探索する為、過去に統廃合が実施された小中学校61校のなかから、小学校6校、中学校5校を抽出し、各学校の児童・生徒の保護者に対してアンケート調査を行なった。この11校を選定するにあたっては、通学距離が統合前後で大幅に異なり、徒歩以外の手段で通学している子供が存在していることを最重要視した。また、過疎地域、都市部に隣接する地域、その中間的な条件の地域の3地域を、それぞれ比較する為、各地域からできるだけ同数の学校を選定することとした。

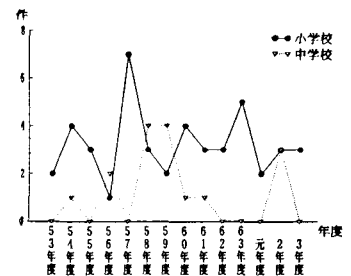
小中学校あわせて1507票を配布し、1210票の有効票を得た（回収率80.3%）。調査期間は、1月16日～1月29日である。

3. 統廃合実施地域の通学交通環境の実態

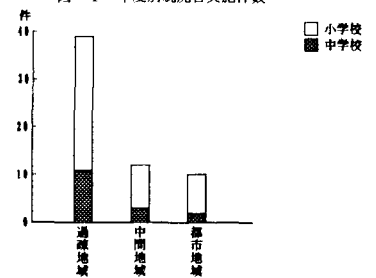
図－1は、統廃合が実施された件数を年度別に、図－2は上述の3地域別に、それぞれ示したものである。これによると、小学校については、毎年2～3件は統廃合が実施されており、過疎地域を対象に、今後とも統廃合が問題となることと思われる。一方、中学校については、全体を小学校と比較すると、統廃合は明らかに少ないことがうかがわれる。

図－3は、過去に統廃合が実施された地域の学校における、現在の通学手段を示したものである。これをみると、小学校においては、徒歩通学者が48%を占めるが、スクールバスによる通学者が24%、路線バスによる通学者が9%存在することがわかる。そのほかの自転車通学者と自家用車の送迎による通学者は少ない。

一方、中学校においては、徒歩通学者は小学校とほぼ同じく47%存在するが、自転車通学者が18%、スクールバスによる通学者は14%である。また、路線バスでの通学者は非常に少なく、小学校と違い、徒歩以外での通学として、バスよりも自転車を使用することが多くなっている。



図－1 年度別統廃合実施件数



図－2 地域別統廃合実施件数

図－４は、今回調査した小学校６校の通学手段を、学校別に示したものである。A、B小は都市部に、C、D小は中間地域に、E、F小は過疎地域に、それぞれ位置する学校である。この図から判断すると、特に過疎地域において、徒歩で通学することが困難な児童が数多く存在しており、統廃合実施地域の通学交通環境は、他地域のそれとは異質なものであると思われる。

４．結果および考察

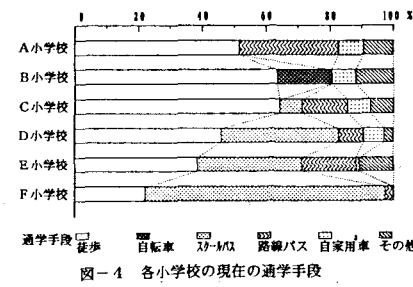
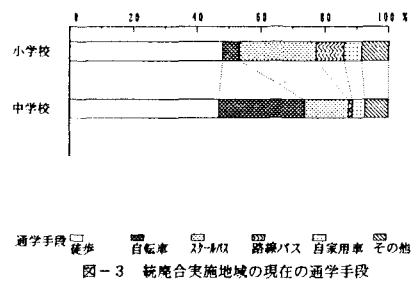
保護者に対するアンケート調査のなかで、表－１に示した１０項目については、数量化理論Ⅱ類による分析を行なう為、「非常に良い」、「どちらかといえば悪い」、「どちらともいえない」等、選択肢を５つ設けた。その結果は、現在分析中であるが、集計の段階で、最も顕著な差がでたのは、「現在の通学手段が適当であると思うか」という項目である。徒歩で通学する子供の親は通学手段に非常に満足しており、スクールバスまたは、自転車で通学する子供の親は、どちらかという満足しているようである。しかし、路線バスで通学する子供の親は、よいとも悪いともいえないという意見が多く、自家用車の送迎によって通学する子供の保護者は、どちらかという悪いという意見が多かった。

これらのことから、以下のことが考察される。

- ・徒歩での通学が何よりも適当である。すなわち、自宅の近くに学校があることが、非常に大切である。
- ・自転車での通学は、徒歩通学に比べると、交通安全上多少不安があるものの、成長段階の子供にとって、悪影響はそれほどない。
- ・スクールバス通学は、あまり健康的ではないが、事故の心配がほとんどないので、特に小学生の親にとっては、安心な通学手段である。
- ・路線バス通学は、スクールバス同様、安心な手段であるが、統廃合が実施されるような地域の路線バスは、運行本数が少ない為、時間に束縛されることが不満である。
- ・自家用車の送迎による通学は、過保護になりがちで、交友関係が心配である。

５．おわりに

学校は、子供の生活に密接に結びついた「コミュニティ施設」であり、徒歩で通学できる位置にあるべきことが再認識された。しかし、過疎地域を中心に、特に小学校は、児童数の減少等に伴う統廃合が、今後とも実施されていくことも推測された。交通環境というカテゴリーだけでは、統廃合を評価することはできない。実際、小規模校での教育はマイナス面が多い。だが、「コミュニティ施設」という立場以外にも、成長段階の子供にとって、「歩く」ということは、足腰の強化や肥満の防止といった体力面からも、地域に対する愛着心や感受性といった精神面からも、非常に重要なことであり、毎日バスに乗っている、得ることのできないものがある。このような見解から、やはり、徒歩での通学が子供にとって最も妥当な手段であり、やむなくバス等を利用する場合でも、自宅とバス乗降場の間を適当な距離にして、少しでも歩行させる等、徒歩通学の子供との「差」を縮める対応策を検討することを提案したい。



表－１ 保護者に対するアンケート調査の一部

質問の内容
・現在の通学手段が適当であると思うか？
・朝の目覚めは、いつもさわやかであるか？
・帰宅後、夕食までの時間は、どの位あるか？
・帰宅後、友達と遊ぶか？
・外で遊ぶ事が多いか？家で遊ぶ事が多いか？
・帰宅後、疲れた様子を見せるか？
・学校での出来事を家族に話すか？
・通学路での出来事を家族に話すか？
・交友関係は広い方か？
・週休２日制は、通学に影響が出ると思うか？

(注) それぞれ５つの選択肢を設けている。